



令和5（2023）年2月26日、広島市佐伯区五日市町で、生きもの観察会を開催しました。今回の主な観察対象は水鳥を中心とする野鳥で、観察する場所は八幡川河口干潟とその周辺です。八幡川の河口は、市街地の近くでありながらさまざまな野鳥が見られる場所で、野鳥愛好団体である日本野鳥の会広島県支部が定期的に探鳥会を開くなど、水鳥の観察に適した場所として知られています。

当日は、小学生1名、中学生1名を含む総勢18名が八幡川そばの“みずどりの浜公園”に集合しました。“みずどりの浜公園”は、広島県が管理する公園で、トイレや駐車場も備わっています。講師は、県内の鳥類に精通した上野吉雄氏と、地元の水鳥を熟知した西本悟郎氏にお願いしました。上野氏は広島県の絶滅危惧種を選定した“レッドデータブックひろしま2021”で、鳥類分科会の代表を務められた方です。観察会では、お二人の他に4名の日本野鳥の会広島県支部の会員の方にサポートしていただきました。



オリエンテーション



住宅そばでの観察

オリエンテーションが終わり、どんな鳥を観察することができるか期待しながらみんなで公園内を移

動していると、ハシボソガラスがベンチにとまりくちばしで何かを割っているのが見えました。飛び去った後に行ってみると、割っていたのはマテバシイのどんぐりでした。ハシボソガラスはどんぐりを食べるようです。

観察会は、公園を出て八幡川に向かう住宅街のそばから始まりました。さっそく、ジョウビタキやツグミが見られました。ジョウビタキは秋に北からやって来る鳥（冬鳥）なので、もうすぐ北に帰ってしまうそうです。ムクドリやスズメ、キジバトも電線にとまっていた。少し歩くと、八幡川の河口から少し上流の土手に出ました。



ジョウビタキ



ツグミ

八幡川の下流は潮の満ち引きの影響を受け、満潮の時には水に浸かり、よく引いた時には砂地が現れます。このあたりは川幅が広く距離もあるので、双眼鏡を使っても鳥がはっきりと見えないことがあります。遠くの鳥を観察するためには、双眼鏡よりも拡大倍率が高いフィールドスコープが便利なのですが、とても高価な機材です。今回は講師とサポートの皆さんが、それぞれ三脚付きのフィールドスコープを持ってきてくださっていたので、双眼鏡と比べてより遠くの鳥まで大きく見ることができました。



八幡川土手での観察



水鳥の多い八幡川

陸地になっている部分にはたくさんの鳥が休んでいます。水面にもたくさんの水鳥が浮かんでいます。カモメの仲間のカモメやユリカモメ、セグロカモメ、カモの仲間のマガモやヒドリガモ、カルガモ、オナガガモ、オカヨシガモがいました。ヒドリガモは最近数が減ったそうです。時々水に潜っているのは

カモの仲間のホシハジロです。ホシハジロは貝を食べるそうです。また、潜って魚を捕るカンムリカイツブリやウミアイサも見ることができました。



マガモ



オナガガモ

川岸の石の並べてある所には、ハクセキレイや街でよく見かける黄色い嘴のムクドリがウロウロしています。ムクドリは岩の上にいるフナムシを食べているのではないかとのことでした。

それらを見終え、八幡川の右岸（下流に向かって右側の岸）を海に向かって移動します。八幡川河口の西側には広島県が埋め立てた土地があります。約半分はこれから利用される部分で、まだ空き地となっています。その一部には、埋め立て中にできた池が野鳥のために残してあります。今回は許可を得て、埋立地の中にある護岸を歩きました。この護岸からは、海側と埋立地側の両側を観察することができます。海側は、埋め立ての際の代償として人工干潟が造成されています。

海側を向くと水面にスズガモやホシハジロ、ウミアイサ、カンムリカイツブリの群れが見え、その中にわずかにクロガモとハジロカイツブリがいました。上空を見るとミサゴがいました。ミサゴは水中に飛び込んで魚を捕るので、餌を探しているのでしょうか。干潟には人工的に入れられた砂が流れ出さないように石が積んであります。その上にはイソシギがいました。背中の色が石の色に似ていて、講師やサポートの方に教えてもらってもなかなか見つけることができませんでした。

埋立地の方を向くと、上空にヒバリがさえずりながら羽ばたいていました。池の中にはカイツブリやコガモの群れが、池のそばにはダイサギやアオサギが、水辺のヨシ原にはオオジュリンもいました。



埋立地から干潟の観察



イソシギ



スズガモ



ホシハジロ（左）とウミアイサ（右）



埋立地内に水鳥のために残された池



池のコガモ

公園に帰ってからのふりかえりで、何種類の鳥が見られたか確認する“鳥合わせ”を行いました。今回の3時間の観察では、42種類の鳥をみることができました。

八幡川の河口干潟に水鳥が多いのは、そこに餌となる生き物がたくさんいることを示しています。水鳥の餌となる生き物が食べる生物もいることになるので、水鳥に関係のある生き物は多くの種類と量になります。八幡川河口にはそのような豊かな生態系が保たれているからこそ、水鳥も多くやってくるのだと考えられます。今回の観察を通じて、干潟の環境に多様な生き物が暮らしていることが実感できたのではないのでしょうか。